

〔原三溪蒐集の名品展によせて〕

## 原三溪旧蔵の伝周文筆『山水図屏風』

(大和文華館蔵) について

—訪友図の大画面化の試み—

昭和44年(1969)11月1日から11月30日までの会期で、京都国立博物館において特別展「中世の障屏画—画中障屏画をふくむ—」が開催されました。その展示室で、当時、大学4年生であった私(林)は初めて大和文華館所蔵の伝周文筆『山水図屏風』(六曲一双、紙本墨画、各隻153.3×362.4cm、原三溪旧蔵)を見ました。その画のしっとりとした濃淡の墨調、律動ある画面構成、山水に棲む人々の自然な姿に感銘し、大学院で室町水墨画、とくに大画面作品の主題とモチーフについて研究しようと心に決めました。

美術蒐集家、原三溪(1868~1939)は、明治40年(1907)頃に、この山水図屏風を入手しました。三溪自筆『三溪帖(草稿)』(矢代幸雄「三溪先生の古美術記」『大和文華』第17~21号)によりますと、この屏風は元和の役後、徳川家康から越前(福井)藩主松平忠直に武勲の報奨として贈られた周文筆四季山水図屏風二双のうちの一雙「春夏山水屏風」と伝えられたものであるといえます。三溪はこの屏風の特質と魅力について「此画気品高邁、布局雄渾、筆趣勁簡」と簡潔に評しています。三溪が愛蔵したこの屏風は、昭和31年2月に大和文華館のコレクションになりました。

現在、周文筆と伝承される水墨

山水図屏風は、7双が知られています。それらの制作は、周文より一世代後の画家の手になるもので、おそらく15世紀中葉以降、後半期にかかる時期の作と考えられます。その多くは、画面構成に四季山水の形式がとられ、主要なモチーフとして、書齋や楼閣や瀟湘八景などが描かれています。しかし大和文華館本には、はっきりとした季節の景物は認められません。この画の魅力の一つに「烟霞」(本紙の素地を活かす)がありますが、それを「春季」「夏季」を示すものとするには、無理があります。また、伝周文筆山水図屏風の一般的な画面構成の型は、一雙の屏風の左右の両端に大きく主山を配し、中央部にかけて渺々たる水景を広げるといったものですが、大和文華館本では、右隻の主山は右端に寄り、やや細目の高峰で、決して強い表現ではありませんし、また中央の水景も烟霞の表現がとられ、曖昧模糊としたものです。その意味で、この種の山水図屏風の中で、大和文華館本は、きわめて異色な作品といえます。

大和文華館本の特異性は、他の屏風に見られない一つの画題が描かれていること、そして六曲一雙の左右両隻を一つの横長画面として、あたかも山水画卷のように、

動勢をもって描かれていることから考えていると考えられます。

応永期(1394~1427)にさかんに描かれた小画面の詩画軸は、「書齋」「送別」「懷友」「招婦」を主題としたものです。中でも「書齋図」は、五山の禅僧たちの「理想の隠居生活を営む場所」を描いたもので、もっとも好まれました。その「書齋」は、秀でた山のもと、そばには清らかな水があり、松樹に囲まれた静寂な境界にあります。それは、現実にあるものではなく、彼らの「心の棲家」であります。

応永以後、室町中期に「書齋図」から生まれた画題に隠居した友人の書齋を訪ねる「訪友図」があります。その代表が「子猷訪戴図」で、雪夜、友人の文人戴安道を舟で訪ねたという晋代の王子猷の故事を描いたものです。それは、香雪美術館の伝周文筆『瀟湘八景図屏風』の中に巧みに描き込まれています。

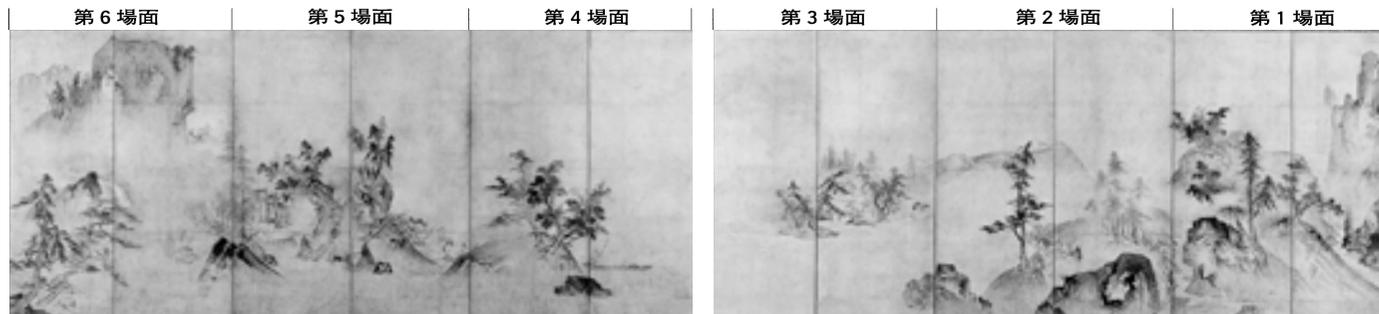
さて、大和文華館本は、「訪友図」を主題とした山水画であります。左隻は、山中に隠棲する友を今舟から下りた高士が訪ねていく場面が表されています。この場面が本図の主題です。右隻は、そこに至る道程が示されています。右隻から左隻へと二扇ごとに空間と時間が移行していきます(挿図、第1場面から第6場面へ)。それは、例えば雪舟の国宝『山水長巻』の展開と同じであります。

その巧みな構成法について、武田恒夫氏は「さまざまな木立や土坡、巨岩といったいくつかのモチーフから構成される諸場面を、前

景に配在させた印象が強い。それぞれ相互が、いわばまとまるかたちの小景観をもって、左右に綴られ、これらを結びつけているのが雲烟の手法といえる」(「小画から大画へ」『日本屏風絵集成・付録4』講談社)と指摘されました。

右隻第1場面は岩間を通る羊腸な山径によって時空の遠さを暗示し、第2場面は遠山を望み、やや開けた明るい展望となり、第3場面は世俗を外に大自然を友として悠々と生を送る樵夫、漁夫の棲家(茅屋)を描き、一人の男が荷を振り分けにして家路を辿ります。右隻第3場面と左隻第4場面との間には烟霞に包まれた湖水、または川が広がっています。そこは俗界と仙境の境目であります。第4場面は棹を返して岸を離れる小舟の男。第5場面はその舟を下りて童子を伴い、はるばると友人の住まいを訪ねる高士の姿が描かれています。真の友の来訪を待つかのように、門は開かれています。第6場面は秀山と暮瀑布と松樹のある佳処に隠棲する友人の書齋が烟霞に見え隠れしています。各場面の樹木は、画面に心地よい律動感を与え、観る人を画の仙境に誘います。

大和文華館本には、岳翁風な岩皴表現が認められますが、岳翁直筆ものではありません。現在のところ、孤立した作品のように思われます。その後、このような横長画面形式の「訪友図」は、江戸時代に入って文人画家の魁、狩野山雪の『盤谷図』(もと画卷)として甦ります。(林進)



季刊 美のたより No.147

平成16年7月2日

発行 大和文華館